

經濟論叢

第六十一卷 第三號

國際價值論について……………松 井 清

貨幣の流通速度の概念に就て……………岩 根 達 雄

片山潜と明治労働運動史……………岸 本 英 太 郎

高橋幸八郎氏「近代社會成立史論」……………河 野 健 二

京都帝國大學經濟學會

片山潜と明治労働運動史

— Sen Katayama; "THE LABOR MOVEMENT IN JAPAN" —

の紹介とコンメンタール

岸 本 英 太 郎

一 はしがき

明治十七年、二十五歳にして渡米し、あしかけ十三年のアメリカ滞在の後、明治二十九年三十八歳で歸國した片山潜の、其の後の大正三年*に至る日本に於ける生活は實に、生きた明治労働運動史そのものである。

* 大正三年五月、潜は四度目の渡米をなし、そして遂に再び歸國しなかつた。この時から、昭和八年十一月五日最後の息を引取るまでの永い亡命生活が始まつた譯である。

彼こそは身を以て日本の労働運動に投じ、その凡ゆる苦難と喜びを経験し、日本労働階級解放のために献身した眞の労働者の友であり、労働運動の輝ける指導者であつた。

片山潜と明治労働運動史

本書は潜が最後の渡米後米國にあつて「平民」を發行し其の他、マルクス主義者として強力的に活動しつゝあつた一九一八年七月九日、ニューヨークで書きあげられた。極めて簡單な、僅か百四十七頁の小冊子であるが、明治労働運動を生々と描き彼の労働運動の實踐を通じて把握された生きた労働運動の記録でもある。蓋し明治労働運動史の文獻中最高水準を誇り得るものであらう。

本書は片山潜が序文でも述べてゐる様に、一九一七年の「國際社會主義評論」The Internationalist Socialist Review のために執筆したものであり、英語國民に提供された最初の日本労働運動史である。

周知の様に潜には西川光二郎との共著の「日本の労働運動」(明治三十四年刊)と旨ふ可なり大きい好著があるが、本書は

片山潜と明治労働運動史

明治三十年以降明治末年までの日本労働運動史全般に亘つての生ける記録であり、この意味で小著作に其の意義は極めて大きいのである。然るに拘らずシカゴで出版（一九一八年刊）された英文著作のためか我國に於ては専門學者の間にのみ餘り讀まれてゐない様に思はれる。筆者の眼についた限りでは嘉治隆一氏がその著「明治の社會問題」（昭和九年刊）七四頁で、潜のこの著作に觸れ、内藤赳夫氏が「勞資協調論者としての片山潜」（大原社會問題研究所雜誌第三卷三號）の中で一部引用されてゐる。最近の平野義太郎氏の片山潜の労働運動を扱つた小著「日本労働運動の序幕と展望」（昭和二十一年生活社、日本叢書四六）も多くの潜の文獻が利用されてゐるに不拘、本書に觸れるところがなく、又玉城肇氏の論文「片山潜」（『自由評論』、昭和二十一年二月、四月、五月の各號に掲載）も觸れてゐない。

今、日本の労働運動は一つの轉換期に直面してゐる様に思はれる。日本労働運動の偉大な先覺者にして指導者たりし片山潜の、黎明期日本労働運動の生活史たる本書の紹介は決して徒勞ではないであらう。

本書は、七章から成つて居る。即ち

第一章 背景

第二章 成功の時代

第三章 一般的な話題の對象となつた社會主義

第四章 社會主義運動と日露戦争

第六十一卷 一六二 第三號 三六

第五章 日本社會黨とその活動

第六章 政府の抑壓と社會主義者の叛逆

第七章 マルクス主義者のグループ

以上の外にルイス・C・フレーナといふ人の十六頁に亘る序文がついてゐる。

二 運動の背景

——労働運動の序幕、鐵工組合と「労働世界」、

日鐵の大ストライキ——

本章で片山潜は徳川時代の職人についての若干の知識が現在の日本労働階級の眞の性格と感情とを理解する上に必要である即ち前者は後者の過去の姿・背景である*、として徳川時代の各種職人モデルに就いて概観した後、「労働運動の紀元」なる小節を掲げ「日本の近代労働運動は日清戦争後、一八九七年（明治三十年）（筆者）の夏、開始せられた*、と言つてゐるであらう。

何となれば、日本労働運動史の發端は、戦勝による清國からの賠償で日本産業が發展繁榮し、かくて労働階級は自覺し、生活費騰貴のため賃銀の増額を要求して多くのストライキを行つたからである」（三六頁）と述べ、労働組合期成會の成立*（明治三十七年七月五日）をもつてそのメルクマールとしてゐる。「近代工業組織は日本に於ては新しい経験であり、従つて労働運動やストライキに對する法的禁止はなかつた。この事は、我々が半

のうちに二千名以上の労働組合期成會——労働組合を作るために設立された協會——會員を獲得したといふ事實の中に示されてゐる。彼等期成會員の大多數は造兵廠や新橋鐵道製作所、横濱ドック、横須賀海軍工廠の職工であつた」(三七頁)と。

* 潜在日本の近代労働者の中堅を徳川時代のギルド職人の、ギルド解體後轉化したものと理解してゐる事は次の言葉の中にもよく現はれてゐる。即ち「今日の日本の最良の労働者は古い鍛冶職及び彼等により訓練された者である。幕府及び日本最初の工場は藩政府によつて開始されイギリス人によつて管理された。これらの工場に行つて働いた者は當時の鍛冶職であつた、その他の産業に於いても事情は同様であつた。これらが日本近代産業の背景である」(三五頁)と。これに引續き「日本の近代産業には、今百萬以上の工場労働者が雇傭されてゐる。五十年前には日本には紡績工場はなかつた。今や百六十二の紡績工場があり、數十萬の少女が晝夜、之等の工場で働いてゐる」(三六頁)と述べてゐるが、これらの少女労働力がどの様に生じてゐるか、或は期成會員となつた造兵廠や海軍工廠や横濱ドック等の多數の労働力がいかに形成せられたか、即ち所謂労働力の原蓄過程については觸れるところも理解するところもない「ギルドの大部分は近代資本主義のもと、工場制度により破壊された」(三五頁)と言つてゐるのみでギルド職人と

近代労働者とは「その眞の性格と感情」とにおいて別個のものであり、系譜を異にするものであり、斷絶したものである事は無視されてゐる。本書を書いた當時の潜在マルクス主義者となりボルセヴィストとなつてゐたが、日本近代労働階級の形成といふ重大な問題を、その「背景」として徳川封建制下のギルド職人について記述する事によつて回避否看過した事は、本書の爲めに惜しい。

* 日本の近代労働運動が日清戦後開始せられたとの正しい立言は、明治の優れた労働運動の實踐家片山潜も、労働運動のユニークな報導者であつた、横山源之助も共にしつかりと把握してゐたところである。横山源之助も言つてゐる、「余は日清戦争を以て労働問題の新紀元となす者なり戦争其れ自身が直に労働問題に關係ありとは曰はじ、然れども戦争の結果は機械工業の勃興を促がし、労働問題を惹き起すに至りたるなり」(日本の下層社會)附録「日本の社會運動」十六頁、明治三十二年刊)と。又その「内地雜居後の日本」の中で「日清戦争の次に來らんとする戦争は何ぞ、貧者と富者との戦争なり、資本家と労働者との戦争なり、國家主義と社會主義との戦争なり、……國結の勢力により社會主義の武器をとりて戦争の用意……」(同書五五頁)と言つてゐる。

平野義太郎氏や山田盛太郎氏によつて、明治初年から同二

十三年までが「資本の本源の蓄積の典型期」として把握されたが、この期間は即ち近代的労働力の形成期であり、かくて日清戦争前後、日本において労働階級が一つの獨立した階級として一應成立したと言ふ事が出来るであらう。近代労働運動の發端を日清戦争後にあるとなす所以である。

労働組合期成會は日本に於ける労働問題・労働運動の開始と同時に生誕した。日本の労働運動・労働組合結成の母體となつたものであり日本労働組合史の發端を彩る本會の成立の意義は決定的に大きい、潜が日本の労働運動の開始を本會の成立の時期たる明治三十年の夏に於いた所以であらう。潜は述べてゐる、「明治三十年は同盟罷工の極めて流行せし年なりき。又凡ての新聞雜誌が盛に社會問題を論ぜし年なりき。而してこの年の七月五日労働組合期成會なるもの生れたリ」(片山・西川共著「日本の労働運動」明治三十四年刊、明治文化全集二十一卷社會篇一六九頁)。期成會は「労働者に自主の氣風を興へ、又其の地位の貴重なる事を知らしむるにあらずんば、労働の救済決して舉らざるべし。而して自由の氣風を労働者に與へ、又彼をして其の地位の貴重なるを知らしむるは、労働組合を造るにあらずんば能はざるべし、他に何等の方法もあらざるべし。之労働組合期成會のある所以なり」(西川・片山共著前掲書、社會篇二二五頁)とある如く近代労働組合の組織のために生

れたものであり、規約の第一章總則第一條に目的を高く掲げて、曰く「本會は我國労働者の權利を伸長し、其美風を養成し舊弊を除去し、同業者相互に親睦する組合の成立を期するを目的とす」と。片山潜は實に其の發起者の一人であり成立後其の幹事であつた。

所でこの労働組合期成會は、明治二十三年アメリカ・サンフランシスコで労働しつゝあつた城常太郎・高野房太郎・澤田半之助等が「歐米諸國に於ける労働問題の實相を研究して他日我日本に於ける労働問題の解決に備へんとする」目的で職工義友會を作つたが、彼等が相繼いで明治二十九年歸國し、澤田、常兩氏が「日本に於ける労働運動の時期已に熟す」と見て明治三十年四月、再び職工義友會を東京麹町區内幸町に起し、革命に反對し社會主義を否定し、所謂組合主義に立つ有名な「職工諸君に寄す」なる印刷物を各工場に配布して其の活動を開始したが、その第一回労働演説會(明治三十年六月二十五日)が神田美土代町の青年會館で開かれた。その席上で高野房太郎氏の發議で期成會設立の議が提出され、かくて七月五日成立したのである(社會篇一六九頁参照)。因みに片山潜は職工義友會の第一回労働演説會で「労働團結の必要」なる講演をしてゐる。

潜は労働組合期成會成立の頃の事情について「演説會には多くの労働者が出席し、論議された話題はストライキやボイコッ

トであり、そして我々は特に、労働者階級の組織の必要を説いたものだ。この時期が我々の仕事の最も愉快な時代であつた。各方面の工場から集つた人々が食事の時、労働運動につき互に話合つた。毎週我々の會のメンバーは増大した。以前に比し遙かに多くの労働者が参加せる會が成功裡に開かれた。やがて集會は労働者自身の手によつて行はれる様になつた。我々三人、即ち高野・澤田と私はこれらの集會に屢々出席し演説した……」(三七―三八頁)と述べてゐる。労働者の労働問題に對する關心が高まつた事がよく表現されてゐる。

これよりさき、潜はグリーンネル大學在學中(一八九三年(明治二十六年))頃、ラッサールの傳記を讀んで「社會主義者」となり(これが社會主義でなかつた事は後に明らかとなるであらう)、エール大學で社會問題を専攻して、明治二十九年正月歸國したが、明治三十年夏、組合派の宣教師長グリン博士より月二十五圓の援助を受けて神田三崎町にキングスレー館を起し、社會改良事業に従事した。當時の潜は「熱心な耶穌信者であつた」(改造文庫「自傳」三三頁)潜は潛米中の一八九四年(明治二十七年)の初春、自人の一友人と「英國の徒歩旅行」をなすためイギリスへ向つた。數ヶ月滯英し社會問題を研究し社會改良事業を視察し、又、マンと會つたりした。潜が社會改良事業に深い關心と興味を懷き數年後歸國してキングスレー館をやる様になつたのもこの英國旅行の影響であつた。明治三十年には

片山潜と明治労働運動史

この英國旅行の所産として「英國今日之社會」(警醒社)が出版されてゐる。誠に當時の潜は一方では自ら「始めは鮮明な立場をもたなかつた。當時予の理想はラッサールであつた」(自傳二三九頁)と言つてゐるが「熱心な耶穌教徒」であり都市改良主義者であつた。玉城肇氏は「キリスト教的思想と社會主義思想と都市改良的思想との三つが混合して具體化したものがキングスレー館であつた」(同氏・「片山潜」自由評論昭和二十一年二月號四一頁)と述べられてゐる。勿論ラッサール流の「國家社會主義者」でなかつた事は前掲「英國今日之社會」や『労働者』(明治三十年刊労働世界社)等の内容を窺ふことによつても知れる。「社會事業を含んだ都市改良主義、社會改良主義」、これが彼の基本的な立場であり思想であつた。彼が「労働問題」と接觸する様になつたのは前述の如く職工義友會の第一回労働演説會で「労働者團結の必要」なる演説をした時からであり、労働組合期成會の發起者の一人となつた事によつて彼の方向は一應決定したと言つていい、明治三十年の後半は一般的に労働運動をもつて多忙であつた。……當時予の理想はラッサールであつた。……労働運動に熱中して盛んに労働運動の急務・労働組合の必要を説いた。……演説口調はどうかと云へば資本労働協同論で……予等は盛んに同盟罷工の效力を説いたものだ」(「自傳」二三九頁)と述べてゐる。しかし彼が「労働運動に味を入れて盡力し始めたのは労働世界を發行する様になつ

てからである」(「自傳」二四〇頁)。

鐵工組合と「労働世界」

『一八九七年(明治三十年……筆者)十二月一日、一千名以上の組合員をもつ鐵工組合が東京で組織された。これは日本に於ける最初の労働組合であつた。その構成と規約はアメリカの諸労働組合のそれを模したものである。同日、労働運動の唯一の機關誌たる「労働世界」の第一號が発行された。私は鐵工組合の幹事の一人であり、「労働世界」の主筆であつた。この小雜誌は日本労働運動史上非常に重要な役割を演じた。労働世界は外國との交換のため一頁の英文の労働ニュースを掲げてゐた。最終號は明治三十四年十二月二十一日に出た。丁度百號發行せられた。これは明治三十五年一月一日から日刊として再刊された。』(三八—三九頁)。「進歩的労働組合の標本」と潜が稱するところの、そして「期成會のおこるや最も早く多く之に應ぜし鐵工」(片山・西川「日本の労働運動」前掲社會黨一九五頁)を中心とした鐵工組合が實に日本最初の労働組合であり、潜は其の組織者の一人であつた。創立當時の組合員は次の如くであつた。砲兵工廠職工六百七十七人、甲武鐵道職工六人、新橋鐵道局職工八十六人、てい信省職工四十人、平岡工場職工四十三人中島工場五十三人、原鐵工場十一人、東京紡績工場十五人、大宮工場五十三人、竹内金庫工場十四人、横濱鐵工百八十五人。

日本の近代労働運動は實にこの大工場の鐵工を中心とする労働

働組合期成會——鐵工組合を母體として出發した。

潜は鐵工組合を組織すると同時に労働世界を發刊したが、當時の労働運動の「基調と精神」を示すものであるとして(三九頁)、労働世界からの次の様な引用を掲げてゐる、「人民は沈黙し口を閉ぢて語らず、余は彼等沈黙者の爲に談らん、余は彼等小者のために大者に向つて談らん、余は弱者の爲に強者に向つて談らん、余は失望して沈黙せるものゝ爲に談らん、余は言はんと欲して言ふ能はざる者の爲に談らん。余は云ふ能はざるも苦痛と不平と不満に堪ゆる能はずして動物的の聲を發しつゝある者の爲に談らん。余は人民の口たるべし。余の口には滾轉は無用なり、よし余の口より出血淋漓たるも余は語りて止まざればなり、余は凡てを談らざれば止まざるべし、余は凡ての方法によりて労働者の組織せられんことを望む、余は労働運動を祝す之れ余が唯一の希望なり……」(三九頁)と。労働世界は潜のこの言葉通り誠に勇敢に活動した。ところで労働世界第一卷第一號の社説において潜は次の様な宣言を掲げてその目的と意圖を明らかにしてゐる。『労働世界は労働者唯一の機關なり。専ら労働者の意想を發揚し、輿論を振起して同情者を團結し、正義の下に確實なる労働組合を組織し、内は労働者の技術と位置を高め、以て其幸福を保持増進せしめ外は日本工業の發達進歩を計らんとす。……労働世界は労働者の進歩と幸福を阻害する者には反對し、努めて文明の開進を計ると雖も秩序を亂

す可き進歩は斷じて許さざるものなり。

勞働世界の方針は社會の改良にして革命にあらず。其の資本家に對するや敢て分裂的闘争を事とせんとするにはあらずして眞正の調和を全うせんとするにあり、若し資本家の動作として當を缺き爲めに勞働者をして受くべからざるの壓制に苦しめんとするに際しては勞働世界は極力以て反對の聲を掲げ勞働者の權利をどこまでも主張せんと欲す。蓋し此の如くにあらずれば到底眞正の調和を望むべからず。

勞働世界の目的は「勞働は神聖なり」「組合は勢力なり」との金言を實行せんとするにあり。蓋し我勞働者の勞働をして神聖ならしめ組合の勢力たる實を揚げしむるは正しく日本工業の發達の基礎を安置するものなり。……故に勞働運動を妨害し

勞働組合を猜疑し又は敵視する者に向ては勞働世界は全力を注いで之に當り、勞働者の地位を明らかにし以て反對者を忠告敬戒せんと欲す。……(傍點筆者)と。

日本近代勞働運動史の發程において、最初の勞働組合の組織者たる潁がこの勞働運動を強力にバックする勞働世界を發行した事は、重大な意義を持つものであつた。然も、第一號から英文欄を持ちその若干を海外に送つた事から「世界的社會問題の機關」となり、英國からも濠洲及び加奈陀、米國は無論のこと、南阿から迄も交換を申込んで來た。數ヶ月ならずして勞働世界は、日本の勞働問題及び社會問題の運動を代表する世界的一機

片山潜と明治勞働運動史

關となつた。從つてフランス、イタリー及びドイツからも雜誌を送つて交換を申込んで來た。イユーマニテは日刊であつたが毎日の分を送つて來た。予は是等交換雜誌や新聞を読むことに依つて社會問題や勞働問題に關する世界的知識を得ることが出來て勞働運動上に非常の利益があつた」(自傳二四〇—二四一頁)のである。良心的な國際主義者として終始した片山潜の、出發を飾るにふさわしい、且つ日本勞働運動史の序幕を彩る輝かしい事件であらう。

日本勞働運動の開始期は好調であり、この事は明治三十年六月から十一月までの政府のストライキの報告に示されてある(三九—四〇頁)、として次の様な統計を掲げてある。

ストライキ件數 二九

參加人員 三、七六八(男 三、五八四 女 一八四)

最大のストライキ 五〇〇人

最小のストライキ 七人

警察に依る彈壓 一二

賃銀の一部値上 一

ストライキの勝利數 一二

部分的な成功 六

失敗 一一

不明 二

片山潜と明治労働運動史

ストライキ指導者の解雇 二八人

最長期のストライキ 二五日間

最短期のストライキ 五時間

潜が「明治三十年の後半は一般的に労働運動を以つて多忙」
「自傳」二三九頁）であり「明治三十年の暮に鐵工組合が出来た頃は、日本の社會は労働問題の特に大に勃興せんとした時であつた」（同二四一頁）と稱する所以である。

日鐵機關工の大ストライキと日鐵爐正會の成立

明治三十一年は當時日本の最大の鐵道會社であつた日本鐵道會社の大ストライキを以つて始つた（四〇頁）、と潜は書いて、次の様に續けてある。「この會社は東京から青森に至る五百哩以上の鐵道と一千人以上の人を雇傭してゐた。從業員の待遇は非常に悪く、彼等はそれに不満を持つてゐた。會社は常に、待遇改善の爲め組織を作らうとする者を妨害すべく監視してゐた。會社は謀叛者をびし／＼と引抜いて邊びな所の驛へ追放した。當時之等の驛には二、三十名の追放者が居た、毎日彼等は會合して其の境遇について語り合つた。」

三十一年一月、彼等の一人が一文書（我黨待遇期成同盟會と稱する文書……筆者）を全線の火夫、機關手に配布した、この文書は彼等の不平を述べ待遇改善を要望したものであつた。この追放火夫・機關手はひそかに組織を作らんとしたがそのうちの一人が裏切つた、しかし文書は發せられて其の趣旨は既に徹

第六十一卷 一六八 第三號 四二

底してゐた。會社は直ちに彼等を解雇したが、これがきつかけとなり明治三十一年二月二十四日ストライキは勃發した（四一—四二頁）。ストライキは數日間繼續しただけで會社は狼狽の結果、全要求を容れたのである。かくて「このストライキの勝利の結果、これに勇氣付けられ、鐵道機關手は組合を組織し會社をして之を認めしめ、スローバド・ショップを確立した」（四二頁）のであつた。潜はこの大ストライキのほか次の如くストライキがおこつたと労働世界の記事を掲げてゐる、即ちその他「十五のストライキが發生した、參加人員は六七六二名で十三のストライキに一五〇名の婦人が參加した」と。そしてこれに續き「一千人の印刷工、七〇名の染物工、六五名の家具製造工が組織され、一六の、それ自身の店舗を持つ労働者消費組合が作られた。これらは主として組織された鐵工と鐵道機關手のそれであり、その一つたる東京に作られた生産協同組合*は、數年のうちに壹萬圓の基金と一千名以上の加入者を持つ強力なものとなつた」（四三頁）と述べてゐる。

* 潜は労働者の手になる生産組合を、共働店（共働工業と呼び非常に高く評價し、これによつて労働者の地位が解放される一手段と見たのであつた。「共和的工業（共働店のこと……筆者）は實に労働者に工業の權利を與ふるものにして労働者にして眞の資本家となるを得て其の労働の結果を充分に領收するに至るべし。……共働店は労働者が激烈殘

酷なる自由競争の戦場に勝利を占むる城廓なり。……」(前掲「日本の労働運動」社会篇二五八頁)と。これは潜在が明治三十三年前、所謂 water and gas socialist であつた事と相通するものである。

視て、以上の様な労働運動の間接的結果として、古いギルドたる船大工及び木組組合が近代的労働組合に再組織された。潜在は屢々そこへ行つて演説した。数年間にすべての組合の組合員は増加した。日本鐵道機關手の組合はストライキ基金として五萬圓を積立て、扶助基金として貳萬圓を積立てた、又機關誌を發行した。鐵工組合は四年間のうちに會員は五千四百名となり會員の疾病死亡扶助金として八千圓を支拂つた。……労働世界は鐵工組合の公の機關誌として利用された」(四四頁)と潜在當時の組合運動の状況を述べ、これは「労働者組織に對する法的阻止のない時で自由に運動をやつた」(四四頁)からであると言つてゐる。しかし直接的彈壓の法律はなかつたが政府の労働運動に對する抑壓は、明治三十一年、鐵工組合の一週年記念の上野觀櫻ピクニクの禁止に先づ現はれた(四五頁)。

労働運動の今二つの間接的結果は「政府が來るべき議會に提出するため工場法案(明治三十一年夏、筆者)を準備した事である」。これにつき潜在は次の様に記してゐる、「法案は全國各地の商工會議所へ諮問された。それから農商工高等會議で審議された結果、會議は價値ないまでに改悪してそれを通した。しか

片山潜と明治労働運動史

し殆んど役立たぬまで骨抜きされた法案すら友愛會の現在のバトロンたる澁澤榮一を含む大資本家の反對のため、次議會に提出されず、それが提出されたのは遙か後年であつた」(四五—六頁)と。彼がこれにいかに憤慨したかは「噫労働者の強請するまで工場法制定せられざるべき乎」(片山・西川共著「日本の労働運動」前掲明治文化全集社會篇一八五頁)と歎息せる言葉の中に如實に示されてゐる。

鐵工組合は工場法案に強い積極的關心を示し工場法修正案を作成し*、その通過のため委員を任命し農商工高等會議委員を訪問などして努力した。しかし資本家の反對のため無駄となつた譯である(四六頁)。

* 潜在は鐵工組合が工場法修正及びその通過のため努力したと本書では述べてゐるが前掲西川光二郎との共著の「日本の労働運動」では労働組合期成會の運動だとしてゐる。ともあれ、原案が適用範圍を五十名以上使用工場に限らんとしたるを、衛生、労働時間、規律、風儀又は教育等の諸點に就て弊害大なるは反て小工場である、として五名以上に修正し、十四歳未満の者の就業時間制限を、原案の十時間を八時間に、休暇については、「少くとも一ヶ月二日の休暇及び一日一時間を與ふべし」とあるを、「毎日曜日及び一日一時間に修正し、「休日少なくて疲勞に疲勞を重ねれば遂に元氣沮喪放逸に流れ、不職々々粗末なる製作品を造るに至り延

いて工業界の聲價を卑しくするは必然なり」と理由を擧げてゐる如き誠に注目すべきものがある。「期成會は以上に記載したる修正意見を以て十月二十三日（明治三十一年）、横濱に於て對工場法案政談演說會を開き次で十一月五日、神田錦町錦輝會館に對工場法案政談演說會を開きて大いに論ずるところありしと共に、陳情委員をして農商務省の大臣、局長、内務大臣等と始めとし、普く農工商高等會議員を訪問して陳情するところ」（前掲社會篇一八四頁）があつたのである。

工場法制定に參畫した岡實氏は其の著「工場法論」の中で工場法を「労働者の聲なくして生れた」（岡氏著「工場法論」改訂増補版一四三頁、大正六年刊）と言つてゐるが決してその様なものとのみ斷ずる事は出来ないのである。安部磯雄も工場法案が現實の日程に上つたのは「労働者がかくの如く己が地位を自覺し始めたるに際して政府は全く無頓着なる態度をとる能は」なかつたからだとしてゐる（「社會主義小史」、大隈重信篇「開國五十年史」下巻九六八頁）。

三 成功時代

明治三十年から治安警察法の制定公布に至るまでの期間は潜の所謂労働組合運動の「成功時代」であり、「明治三十年十二月一日には鐵工組合が、明治三十一年三月には日鐵機關手火夫

組合（矯正會）が組織され、會員は皆増加し、好調であり、かくて明治三十二年は日本労働運動の最も實り多い年であつた。労働運動に携はる者は皆労働階級の偉大な將來につき確乎たる自信を持ち、勇氣と熱心とをもつて働いた」（四七頁）と潜は述べてゐる。

更にそれに續き、當時の情態を次の様にいき／＼と描いてゐる。即ち「東京市の各方面で、又東京の近隣で、労働者の演說會が規則正しく開かれ、どの會でも聴衆が増加した。労働世界——それは廣く新しい労働運動のニュースを報告してゐた労働階級の唯一の機關誌であつたが——の購讀者は着實に増大した。労働世界は實際、労働運動宣傳の唯一の機關であつた。それは労働階級の一般的教育を企圖した。

我労働階級は當時新しい知識に對し非常に熱心でそれを一旦獲得するやその思想を實踐するに躊躇しなかつた」（四八頁）と。そして續いて協同組合運動とその宣傳の實情を記述し、又「街頭行進と屋外集會のほかは、労働運動は政府の妨害を受ける事が比較的になつた。時として警察は労働者集會を中止させんとしたが、これは我々のアジテーションを妨げるものではなかつた。却つて少々の警察の妨害は刺戟を與へ一般の同情は我々の側にあつた」（四九頁）と云ひ、前述の鐵工組合の一週年記念の上野公園觀櫻ビクニツク禁止によつて政府は労働運動の發展の妨害に乗り出したが、「適用する法律が無かつたので

我々は數年間、教育、宣傳の仕事を活潑に續けた。警察の妨害でさへアジテーターによつて労働運動發展のために利用されたのである。

労働階級は今日、彼等の狀態改善のための直接的武器としてストライキを利用してゐる」(五一頁)と書き、色々の労働組合の組織狀態を記述し、「この事は労働運動が都市を通じてよく發展し、すべての職業において労働者が彼等自身の組合を持つ必要を感じてゐた事を示してゐる」(五二頁)と述べてゐる。

活版工懇話會の演說會における片山潜と桑田、

金井の論議

明治三十二年七月九日の活版工懇話會主催の神田青年會館に於ける有名な演說會は當時の所謂社會主義と社會改良主義との論争として日本労働運動史上極めて重大な意義を持つものであつた。この演說會では桑田熊藏が「社會改良主義」、片山潜が「調和主義と社會主義」、金井延が「社會主義を駁す」と題して演說したが、これが社會改良主義と社會主義との論争となつたのである。片山潜はこれを極めて簡単に次の様にスケッチしてゐる。「東京の活版工の組合は鐵工や機關手の組合によつて採用されてゐる手段とは異つた手段(手段)で労働問題を解決しようとした。この組合は最初から所謂、資本と労働の利害の同一である事を主張した。衆議院議員の島田三郎がその會長に選ばれたのは、彼が資本及び労働兩者の友であると考へられた

片山潜と明治労働運動史

爲めである。……彼等は東京帝國大學の諸教授の熱心な支持を受けた。この組合の組合員は二千名であつた。當時、帝大教授及び其の追隨者たちは、活版工組合の彼等に對する友好的態度に勵まされ、社會改良主義の名のもとに一種の社會改良をはじめてゐた。これら大學の人々は獨逸思想に強く影響されてゐた。彼等は、現在の資本主義社會の基礎の上で純粹で單純な改良を主張したのである。我々は彼等と公開の席上及び雜誌で烈しく論争した。労働者大衆は、鐵工組合及び労働世界の主筆の立場に味方したのである」(五三—四頁)と。

擬て、この演說會で、桑田氏は「要するに労働者と資本家といふものは、經濟の進歩の爲めに互に調和して相助け合つて行かねばならぬといふことは、これは經濟上の自然法である……」と述べ組合の必要なことにはふれてゐるが、その方向が社會主義反對にあつた事は言ふまでもない。潜は自傳で「桑田君は社會改良一點張りであつた」(二四六頁)と言つてゐる。潜は桑田氏の調和論に對して「労働と資本の調和といふものは必要である、併しながら、今日の有様では労働者と資本家の調和と云ふことは到底出來ない。今日の調和は調和ではない。今日の有様で行かうといふには、詰り主人と家來の關係とでも云ひますか、否主人と奴隸の關係だ、服従者だ。眞正なる——眞正の調和をするにはどうしても吾々が労働者に旗幟を掲げさせねばいけない。……だから組合は必要である。同盟罷工も必要であると

言つたのです。……」(西川氏との共著「日本の労働運動」前掲
社會篇二〇九頁、傍點筆者)。

これに對し金井延は潜に反對し、第三者の同情を得て組合を
發達せしめよ、又政治にかゝつてはいけぬ旨、強調し、鐵
道や水道の國有の如きは社會主義に非ずと反駁したのである
(潜は水道や瓦斯の公有を社會主義の實行であると考へてゐて
演説の中でそれを語つたのである)。「貴下の云ふところは社會
主義に非らず、それに相似たる方針なり」と。片山潜は後日、
労働世界、明治三十二年十月十五日號で「金井延氏に答ふ」を
書きこれに答辯した。即ち「金井氏は鐵道國有、水道瓦斯の市
有は社會主義にあらずとなす。余も亦是等のみを以て社會主義
と云はず、然れども之を社會主義の應用されたるものなりとい
ふ。……ビスマークの社會主義的政略は歐米各國が認識す
るところなり。……故に社會主義は漸次實際に實行されつ
ゝあり。……氏は余が社會主義といふ字句を用ひたのに感
服せず他の適當の言葉があるべしなど冷評せられたり……」
(傍點筆者)と。

この懇話會の論争につき潜は、後年彼が眞の意味の社會主義
者となつてから執筆した西川光二郎氏との共著の「日本の労働
運動」の中で「無論始めより調和主義なる懇話會は、此の場合
に桑田、金井氏等の言に賛成したりき。而して此の時の衝突は
過去の出来事としてのみ談るべきにあらず。將來屢々起るべし

れば、吾等は切に労働者諸君に望む。未だ組合にまですら發達
し居らざる労働者の團體に向て、柔順なれ局外者の同情と資本
家の同情を得て發達せよと云ふ者と、旗幟を明らかにせよ、大
膽なれよ、といふ者と、何れが果して親切なるかを熟考されん
ことを」(前掲社會篇二一〇頁)と語つてゐる。又「自傳」に
おいては金井延との論争について「……社會政策と社會主義と
の對照論でもやつたらば博士は得意になつて、予に喰つて掛つ
たらうが、予はそんな事を獨逸から輸入して日本の労働運動に
妨害を與へんとする社會政策一派の掌中の捕虜になつて労働者
の前に大恥をさらすは馬鹿の上塗り……」(自傳二四七—八頁、
傍點筆者)と回顧してゐる。

以上の様な論争を通じて吾々は労働運動の實際家としての潜
が、組合を經濟主義に局限せんとするに對して、そして結局これ
らが組合運動を壓殺せんとするものである事を見抜き、旗幟を
掲げ大膽となれ、と労働團結、その政治的行動の必要を力説し
た意圖が明瞭に推察されるのである。だが彼の社會主義は「資
本と労働との眞正の調和論」の別名に外ならず、ビスマーク的
「社會主義」に外ならなかつた。共働店を、労働者を資本家たらし
めるもとして高く評價した彼の反面をなすものであり、彼の
社會主義はその意味で、「水道瓦斯社會主義」(water and gas
socialism)であつた譯である。明治三十二年四月十五日の「勞
働世界」三十四號の彼の論文「桑田學士の社會改良論を質す」

を見れば、彼は社會政策を實に社會主義と理解してゐるのである。理論家金井延は實際家片山潜の社會主義の無理解を鋭く衝いた譯である。だが潜は金井等の協調論、改良論が實は勃興しつつある労働運動を壓殺せんとするものである事を、實際家として本能的に感知し、これに駁論を與へたのである。當時の潜は理論的には、金井延に其の誤謬を指摘されてゐるものであり、安部磯雄、村井知至（「社會主義」明治三十二年刊）に遠く及ばなかつたのである。こゝに一つのエピソードがある。「社會主義者」片山潜は鈴木純一郎の紹介で明治三十年頃、「社會政策學會」へ入會してゐる。そして、あの有名な「社會政策學會趣意書」の起草に参加してゐるのである。次の潜の言葉は、弱い理論家潜と強い實際家潜の、生々とした姿を誠によく物語つてゐる。即ち「先づ宣言書を發表するのだと言つて予も其の委員の一人に加へられた。其の冒頭に「我々は極端なる社會主義に反對する」なる文句があつた。予は是に反對した。我々は學者をもつて自ら任じ社會の改良に従事せんとして斯會を組織するのであるから、積極的立場に立つてやらねばならぬと思ふ。それにネガチヴな立場に立つて社會に公表するのは卑劣だと言つたが、多數決で原案に決定した。予はもう此の時は社會主義者であつたが決して極端な社會主義者ではないと自信して居つたから自ら脱會もせず、又會員の人々も他人扱ひもせず、會員として斯會に多少盡力をしたものだ（『自傳』二四五頁）と。

片山潜と明治労働運動史

彼が眞の社會主義者となるためには、明治三十三年の治安警察法制定による苦い經驗と苦惱とを経ねばならなかつたのである。

だがこの時代にあつても、片山潜は「労働者の日常利益の實現をば、労働運動の本質と規定」したのであつた、共働店を重要視してこれが宣傳發達に努め、又工場法の實現^{*}を熱望し、更に外ならぬ「水道瓦斯社會主義者」として労働者のために公共事業の公有を強調したるが如きその一斑を物語るものである。そしてこの労働者の日常利益の重視、その實現・確保といふ點から彼は社會主義者になつたのである。安部磯雄の言葉を借りれば「労働問題及び社會問題を研究する者の終に社會主義に到達するは自然の順序たるべし」^{***}である。

* 平野義太郎氏「日本労働運動の序幕と展望」二一頁

** 期成會で工場法修正案を作成してその通過のため並々ならぬ努力を續けた事は既に述べたが、潜は文筆活動としても例へば六合雜誌（明治三十二年九月）誌上で工場法の實現、そのための政治運動を大いに力説してゐる。

（今後の労働運動）

*** 前掲、安部「社會主義小史」九七〇頁

初て潜は活版工懇話會の演說會での論争の本質を簡単にスケッチした後、労働世界が社會主義欄を設けて社會主義の宣傳と教育とに乗り出した事を記してゐる、「明治三十二年はじめてか

ら労働世界は毎號、社會主義研究の特別欄を設けた。これ以前にも、時々、社會主義運動の諸事情を廣く報じてゐたが、いまや我々は社會主義の目的と原理に従つて労働者を教育すべき時期が來たと考へた（五四頁）と。

だがこの時期（明治三十二年）においても潜の社會主義が未だ社會事業や社會改良や社會政策や社會主義を、ごつちやにしたものであつた事については既に一言せる通りである。

* 労働世界明治三十二年第二十七號において「労働世界は労働者の唯一機關なり、又代表者にして辯護人なり、正義をもつてたち進歩の態度をとる。吾人が社會主義欄を設くるは知識運動のために非ず、又好んで夢想の言を吐かんとするに非ず、吾人はこの欄において毎號歐米における社會主義の大勢を記して以つて實際に社會主義は二十世紀の人類社會を救ふの薪福者なるを示さんと欲す」と宣言した。潜の社會主義の理解が極めてあいまいであつたとは言へ、この宣言にも見れる様に彼のいかにも着實な労働者の立場に立てる態度はやがて彼を眞の社會主義者たらしめたのである。

潜は、社會主義を標榜した労働世界の外に、尙、大井憲太郎の大阪週報が、同年の十一月に現はれ、それが「社會主義が労働問題の唯一の解決策であるとして之をはつきりと擁護した（五四頁）旨記し、明治三十二年が社會主義運動にとつて重要な

出發點であつた事を示唆してゐる。そして明治三十二年を回顧して「明治三十二年は我々の運動が非常にうまく行つた年であつた。私は春、秋二回、鐵工組合の幹事としての資格で、東北地方へ宣傳旅行に行き、非常に成功をおさめた。鐵工組合のすべての支部は最善の狀態にあり、労働運動について何等のトラブルもなかつた。東京ではコックの組合が、横濱では家具工の組合が労働世界並びにその主筆の直接の援助のもとに組織せられた」（五五頁）と述べてゐる。かくて「明治三十三年は日本に於ける社會主義及び労働運動の明るい期待をもつて明けたのである。人々は一般に社會主義、特に社會改良に非常に關心をもつて來た。板垣伯は社會改良のための俱樂部を作り、自由放任學派の指導者、東京經濟雜誌の田口博士は單稅論を熱心に唱へて地主を烈しく攻撃した。この時代に社會改良といふことについて關心が高まり、それが熱心に論議されたのは、資本家の不正と労働階級に對する資本家階級の非常な殘酷な取扱ひに對する反動としてであつた」（五六頁）のである。そして潜はその實例として豊國炭礦の瓦斯炭塵爆發（明治三十二年六月）における二百七名の鐵夫の犠牲、三十一名の寄宿舎女工の焼死事件其の他をあげてゐる。因に女工焼死事件について潜の報ずるところは次の如くである。豊國炭礦の爆發の「少し後、三十一名の紡績女工が或る紡績會社の寄宿舎で焼死した。即ち、彼女等はその日、十六時間の労働に従事した後、逃亡を防ぐ爲め、外部か

らドアや窓がしつかりと閉ざされた寄宿舎に閉じこめられた。火事がおこつた時、あわれな、疲れ果てゝゐた女工達は逃れる事が出来ず、窓から飛び下りた者は不具になるか或は死に、他の者は焼死した」(五七頁)と。

以上の様な事件によつて民衆は覺醒し、かくて社會主義を是認する機になつたと、次の様に述べてゐる。「全國を通じて、色々の産業に於ておこつた之等の事件及び其の他多くの災害は、民衆を覺醒せしめ憤慨させた。人々は資本家の殘虐さに口をそろへて抗議した。その結果、労働世界によつて採用された方策(社會主義：筆者が民衆の是認するところとなつたのである)(五八頁)と。

治安警察法の制定

明治三十三年の春の議會で治安警察法が制定され直ちに施行された。これは労働者が組合を組織する事を禁ずるもので、凡ゆる分野の労働運動に死の宣告を與へるものであつた。この法律は特に小作人並びに工業労働者が、彼等の利益のために資本家並びに地主に反對して運動する事を禁ずるものであつた。賃銀値上、労働時間の短縮、地代の引下の運動に他人を誘引せんとする事は治安に反する犯罪だと宣言されたのである。そして後には、すべての労働運動が犯罪を意味すると解釋されるに至つたのである。

同じ年に産業組合法*が作られたが、労働者は治安警察法の

片山潜と明治労働運動史

ためこの法律を利用する事が出来なかつた。この爲め労働者は普通選舉權を獲得するの必要を痛感し、かくて潜は、普通選舉期共同盟會を明治三十三年に組織したのであつた。多くの著名人がこの會に参加した。日本鐵道會社の矯正會も參加した。しかしこの運動も普通法案が下院を通過したのみで、上院で壓殺された(五九頁)。

*潜は「三十三年三月治安警察法と産業組合法と出でたり。前者は労働者の爲めに悲しむべき法律にして、後者は労働者の爲めに悦ぶべき法律なり」(片山・西川共著「日本の労働運動」前掲社會篇一八六頁)と述べてゐる。

この治安警察法の制定實施こそ、労働運動の實踐家、片山潜をして、從來の如き「社會主義」(眞正なる勞資調和論)を放棄せしめ、眞實の社會主義者たらしめるに至つたものである。從來の改良主義と決定的に袂を別つに至つた。明治三十三年五月の六合雜誌に執筆した潜の「貧富の戦争」がその轉換點であつた。今や「労働組合は社會主義の實行を圖る労働者政黨の大貯水池たる使命を有するに至つた」*のである。

*内藤赴夫氏「労働運動黎明期における片山潜の社會主義思想」大原社研雜誌三卷四號三七頁

「社會主義國家を組織せんとするには、社會的革命に依らざるべからず。……………生産上に於ける資本家制度を廢止せざるべからず」(貧富の戦争)と。

治安警察法出づるや労働世界は「治安警察法と労働者」なる潜の論文を掲げ次の如く反對した、「……資本家と労働者の衝突、地主と小作人との關係は經濟問題なり。警察權の干渉すべき範圍にあらず。故に吾人は此の度案には大反對を唱ふるものなり。斯る法律は我労働者小作人に不平の種子を蒔くものなり。然り、無政府黨と虚無黨を我社會に蒔く者なり。

吾人は極力以て、アナキストとナヒリストに反對する者なり。其の起るを杞憂する者なり。故に斯る法律には反對する者なり」と。又同じく労働世界は論じて曰く「労働運動は労働者の一種の學校であつて、色々の知識道德がこれによりて労働者の頭へ入るのである。然るに明治政府は此の見安い道理を知らぬ。知らぬのみならず、今日尙労働者を盜賊かなんぞの様に心得、集まれば恐ろしいものと考へて居る。實に之は日本國の爲めに悲しむべき事である。……、労働運動といふものは眞に労働者が自覺し、カル・マルクスの所謂數の哲も即ち「労働者の團結は獨り數なり。而して結合せざる數は駄目なり。結合よ獨り結合、汝等を救はん」を了解したならば、道理と道德の許す限りにおいては天下に敵なしである。世間の評判がどうであらうと、政府の方針がどうであらうと、夫れは少しも恐るゝに足らないのである。唯政府のやり口が悪いと戦争の仕方が異なる文である。噫眞に吾人は戦はんと欲せば戦ひ得るなり」

〔日本の労働運動・社會篇一八七頁〕と。誠に堂々たる文字

である。

かくして潜等は今や、労働組合の時に示した以上の熱心さと熱狂さをもつて、労働者の會合において社會主義を教えたのである。そして斷壓に却つて掲載せられて、労働者を煽動し彼等の間に社會主義を宣傳したのであつた。一般の集合で、労働運動や社會主義について語る(言論の)自由は、労働組合やストライキやボイコットの問題についての自由より遙かにゆるやかであつた。この爲めに潜等は數年間、労働者に社會主義を教育する事が出来たのであつた(五九一六〇頁)。

以上の様な情勢のもとに日本鐵道機關手火夫組合は社會主義化*したのであり、この矯正會の社會主義化といふ事實の上に日本最初の社會主義労働者政黨「社會民主黨」が創立されたのである。

* 矯正會は明治三十四年三月の大宮市における年次大會で、労働問題を解決する唯一の方策は社會主義であるとの決議を行ひ、普選運動に参加するため實行委員會を作つたのである(六〇一頁)。

社會民主黨の創設禁止と社會主義協會

「日鐵機關手組合によつてとられた社會主義の明瞭な立場及びこの時代の多くの同様な情勢は、我々に、労働者は政治運動の準備が充分出来てゐる事を確信せしめた。かくて鐵工組合本部における數週間の熱慮協議の後、明治三十四年五月二十日、

我々は社會民主黨と稱する労働政黨を作つたのである。同時に社會民主黨宣言を發表した。

この黨の創始者は、幸徳傳次郎、安部磯雄、木下尚江、河上清、西川光二郎と私であつた（六一頁）と片山潜は創立の事情を述べてゐる。今や石川三四郎の所謂「……更に其の純然たる經濟的運動より進んで労働者自身の政治運動起らざるべからず。即ち労働者自身の社會主義運動起るに至りて茲に初めて労働者の解放を望み得べし、希望の光明は初めて労働者の前途に輝くべし」（石川旭山編、幸徳秋水補「日本社會主義史」明治文化全集社會篇三六二頁）といふ時期が到來した譯である。

扱て吾々はこゝに日本社會主義運動の發生について一言觸れねばならない。日本労働運動史は又同時に日本社會主義運動史でもあり、その關係は密接不可分だからである。ところで前掲石川旭山篇の日本社會主義史はこれを次の様に述べてゐる。

「明治二十七年七月、日本社會主義史の上に一新時代を劃したる日清戦争は開かれたり。若し日本社會主義史を分つて前篇本篇の二篇となさば、日清戦争は實に其中心點なり。日清戦争は將に日本社會主義運動本舞臺の序幕を開かんとするの準備なりき」（前掲社會篇三五三頁）と。労働運動の序幕が日清戦争を境として切つて落されたと同じく、社會主義も又然りであつた。日清戦争を劃期とし日本資本主義は漸く自己の足をもつて立たんとし、社會の支配的な制度となり、労働階級は、極めて不徹

底ではあつたが二十年代までの資本の原蓄期を経て一つの階級として成立した。近代的労働運動と社會主義運動とはこの基礎の上に始めてそのものとして展開し得る客觀的な地盤を得た譯である。

勞資の原初的な對立と闘争が明治三十年以前にあつた如く、社會主義も思想としては既に早くより宣傳されてゐる。「國民の友」や「六合雜誌」が社會主義思想や歐米の社會黨運動を報じてゐた事は餘りにも著名である。明治二十六年には西川光二郎等に大きい影響を與へたと傳えられる平民叢書第六卷の「現時之社會主義」（民友社刊）が刊行されてゐる。細川嘉六氏も明治二十二年、三年以來社會主義思想はその以前に比較して飛躍的に紹介され……二十五、六年は社會主義思想が一般的に流布し、或る程度その地歩を確立し始めた時期である」（同氏「日本社會主義文獻解説」一二頁、一四頁）と述べられてゐる。そして明治三十年以前を第一期とよび三十年以後大正三年までを第二期といひ、この期においては社會主義思想が思想宣傳なる域を脱却して「勤勞者大衆の組織運動と抱合すると共に海外の社會主義運動と呼應しつゝ新たな發展を獲得せんとする階級闘争の段階に入」（同一五頁）つたとしてゐる。

社會主義思想の發展について大きな役割を演じたものは、明治三十一年十月創立されたキリスト教徒中心の「社會主義研究會」であつた。その目的は「社會主義の原理と之を日本に應用す

るの可否を考究する」事であつて、片山潜、河上清、安部磯雄、村井知至、豊崎尊之助、幸徳秋水等往年の著名社會主義者を網羅してゐた。この會について石川旭山の前提「日本社會主義史」は次の様に記してゐる、「其の目的とするところは『研究』にあり、其の人物には片山潜の如き實際運動家あり、幸徳の如き物質論者あり、而して多くは基督教徒たり。社會主義研究會は恰かも一八八三年に英國に創立せられしフアビアンソサィテの如き團體なりき。……彼等は斯の如くにして漸く研究を積み來れり。然るに一方を顧みれば、労働運動は彼が如く益々隆盛なるに至り、加ふるに労働運動者と彼等とは相接近し來り片山の如き労働運動の首腦なりし者も研究會にあり、村井、安部の如き學者側のもの亦た自ら労働運動に投ずるの有様となれり。

労働組合も、研究會も、何れも孤立しては完全なる團體と言ふべからず、兩者は俱に社會主義運動の半面をのみ有する不具者なりき。

彼等は到底結合せざるを得ず。然り、彼等は遂に一團となれり。明治三十四年五月二十日、日本社會主義史に大なる記念を遺したる社會民主黨起る。蓋し久しきの間、日本の社會を區々に行き、別々に流れたる社會主義的思想と運動とは、茲に渾然として一體を成せるなり」(前掲社會黨三六三頁)と。

社會主義が單なる思想としてではなく運動となつて労働階級の

中へ根を下ろし始めたのは誠に社會民主黨成立前後を起點とした。「日本社會主義史」の著者石川旭山は、例の明治三十二年の活版工懇話會に於ける片山潜對桑田熊藏・金井延の論争をもつて社會主義と社會改良主義との闘争としてこれを社會主義運動の一齣として理解してゐる。石川旭山は言つてゐる、「當時の労働運動に就きて注意すべき二點あり。一は、當時の運動が從來の政治運動より全然獨立して起りたること、二は、當時の労働運動者中に資本労働調和論と社會主義的不調和論者とありしこと即ちこれなり」と。そして「……當時日本労働運動の中心とも見るべき労働組合期成會の首腦たる片山潜は實に社會主義の理想のもとに其運動をなさんとする者なりき」として懇話會の衝突の事情を述べてゐる。だがこれが、本質的には社會主義と社會改良主義との衝突といふよりも單純な「労働調和論」と「真正の労働調和論」とのそれであつた事は既に述べたところである。唯桑田熊藏・金井延兩氏の労働調和論が、實は明治三十年のストライキの波と、社會主義思想の普及に對してこれを阻止せんとする意圖をもつてゐた事は明らかで、結局、調和論とは實は労働組合運動阻止論の別名に外ならなかつたのである。潜がこれに、組合運動の實踐者としての本能から反對した譯である。

平野義太郎氏が金井延の協調論の本質を「金井延の反對論(片山潜の演説に對する反對論のこと……筆者)は、組合を經濟主

義に限局するかに装ふて、實は治安警察法の制定と相俟つて組合發展の阻止と社會民主黨の禁止を目指すものであつた」(「日本労働運動の序幕と展望」一五頁)と鋭く指摘されたが正にその通りである。

かくて日本の社會主義運動は治安警察法制定實施による「真正の勞資調和論」の眞正の社會主義への轉換(片山潜)による労働運動の社會主義との結合、日鐵矯正會の社會主義化・社會民主黨の創立に始まると言ふべきであらう。理論家安部磯雄、村井知至の社會主義論は、實踐家片山潜の社會主義論より遙かに高い水準を示すものであつた。だが實踐家片山潜の從來の反社會革命論が治安警察法といふ現實の嚴しい労働運動彈壓法に媒介されて社會主義運動にまで發展し得たのである。社會民主黨創立の直前發行された片山潜の西川光二郎との共著の「日本労働運動」の結論で、彼は「労働運動は不倒翁なり、幾度倒れても起きずんば止まず。而して倒れて起るの間に進歩せずんば止まざるなり」と云ひ、治安警察法によつて明治三十三年一時労働運動は衰へたが三十四年に入つてより「復活の徴と労働運動の規模更に大ならんとするの徴現はれたり」と誌し、獨逸の労働運動の社會主義化の情勢を記述し、將來の日本の労働運動に及び、労働運動の「永久の方針」として次の如く述べてゐる、「労働者をして或は労働組合を造り、經濟團體即ち共働店及び

共働工業等を造らしめ、更に之を大連合して政治運動をなさしめ、政治上に得たる勢力を以て、労働者最後の目的たる社會主義の實行を計るにあるなり」「社會篇二七九—二八〇頁」と。そして社會主義實現のために労働者教育と労働者の犠牲の精神並びに同情の念が絶対必要であると強調してゐる。

例へば「犠牲の精神」のところでは「……労働運動の主眼は労働者全體の幸福なり、而して労働者全體の幸福は一致團結を以てするにあらずんば達せざるべからざるが故に先覺労働者には是非とも犠牲の精神あらざるべからず」と云ひ、「同情の念」のところでは「労働者は一階級なり、利害を一にするものなりとの念極めて強く、従つて労働者間に同情の念の盛なるにあらずんば、労働運動は決して盛大とならざるべし。……一人の労働者虐待されれば全體が虐待されし如く感じ、一人の受けし耻辱は全體の耻辱と感ずるに至りて、労働運動は始めて天下敵なしとなるべし。労働者に此の感起るまでは互に同情の念なく、同情の念無き限りは團結極めて弱く、資本家は思ふがままに之を取扱ふを得べし。嗚同情の念!! 同情の念!! 此は大に説く所なからざるべからざる者なり」と言つてゐる。これは共働店を労働者が資本家となる道だ、と言つたり、社會政策と都市改良事業と社會主義との區別さへつかなかつた明治三十二年までの潜の社會主義とは本質的に異つてゐる。しかも地道な労働運動の實踐家らしく、明瞭な階級的自覺の上に立ち、プロレタリ

アートの役割を認識さへしてゐる。潜は正に日本の現實の労働運動の中に没入し、身をもつてそれを實踐する事によつて眞の社會主義者となつたのであつた。そしてこの轉換が實に治安警察法によつて謀られたのである。

かくて我々は労働運動黎明期の先覺者としてのみならず社會主義運動の序幕を切つて落した最も偉大なる先覺者として片山潜を高く評價しなければならぬのである。片山潜は眞の労働者の友であり、かくてこそ偉大な社會主義者となり労働運動の指導者となり得たのである。彼はいかなる意味においても決して露骨社會主義者ではなかつた。常に労働者の立場に立ち、労働者の利害を瞬時も忘れなかつた。明治三十年八月十五日の労働組合期成會主催の芝の唯一館における演說會で、彼は次の如き「労働者の希望」と題し演說してゐるが、この様な彼の自覺的な労働者の態度こそ、其の後、「社會政策的都市改良的社會事業的」社會主義から、その方向を誤る事なく、眞實の社會主義へと發展せしめたのであり、明治期日本の労働運動を社會改良主義の影響から脱せしめ（活版工組合の没落と親友會の成立の如き）或は守り得たのである。

「労働者の希望は何も學者になる、資本家になる、政治家になる等と云ふことでもなくとも宜しい。労働は神聖だと云ふではない乎。労働者は一生涯労働者たるの希望を有して宜しい。……労働は神聖だ、労働は公共事業だと考へるから諸君は何も學

者や政治家や資本家になりたいとの心を起さんでも宜しい。唯自重すると共に社會に向て要求すべき事を要求し、威張て誇て一生涯を労働者として送れと云ふのである。之が労働者全體の希望でなくてはならぬと言ふのである。

ソフするつぎに此の労働者全體の希望はドツしたら達せらるゝかの問題が起る。私は考へる……即ち團結……」（前掲社會篇二五二頁）。

我々社會民主黨は直ちに禁止せられたのであつたが、宣言*は「東京の四つの日刊新聞及び労働世界並びに地方の一日刊新聞」（六一頁）に發表せられ、社會主義を廣汎に宣傳し、人々に強い印象を與へたのである。いふまでもない事であるが宣言を掲載した新聞・労働世界は禁止となり、起訴された。石川旭山はこの彈壓がビスマルクの故智に倣ふものであると云ひ、そして、社會民主黨實現の意義を次の如く誌してゐる、「社會民主黨は唯其の宣言を發表せしのみにて滅亡したり。然れども其一たび世に公にせらるゝや、社會は青天に霹靂を開けるが如く、驚きの眼を開いて之を迎へたり。而して社會主義に對して大に眞面目に注目するに至りぬ。……世は其の潜める一大勢力の發現せるものなるを認めて、等しく之を將來怖るべしとなせり」『日本社會主義史』前掲社會篇三六七頁と。

*社會民主黨宣言は、如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは、實に二十世紀に於けるの大問題なり、との有名な書出し

から始め、經濟上の平等は本にして政治上の平等は末なり、……經濟上の不公平にして除去せられざる限りは人民多數の不幸は依然として存すべし、との立場から全力を經濟問題に傾注せんと述べ、先づ八つの理想項目を掲げてゐる。

其の主なるものは次の如くである。3. 階級制度を金廢すること。4. 生産機關として必要なる土地及資本を悉く公有とすること。5. 鐵道、船舶、運河、橋梁の如き交通機關は悉くこれを公有とすること。6. 財富の分配を公平にすること。7. 人民をして平等に政權を得せしむること。8. 人民をして平等に教育を受けしむる爲に國家は全く教育の費用を負擔すべきこと。以上の理想項目に續いて實際的運動の二十八項目を掲げてゐる。これは所謂ブルジョア民主主義の凡ゆる分野に亘つての綱領であり、平野義太郎氏の言はれるやうに「當時の社會民主主義の運動の現實的内容は、つねに社會主義運動が、ブルジョア民主主義運動を結びつけて展開され、團結、罷業、集會、結社、出版の自由を求め、日鐵矯正會をさへ解散させ、社會民主黨を禁止した治安警察法そのものの廢止にむけられ、さらに普通選挙の要求、非軍備（開展した）（日本労働運動の序幕と展望）（二五頁）性質のものであり、廉價な政府への要望であり、労働者小作人の完全なる保護の要求であつた。この二十八項目のすぐ後に、「我黨は此の如く社會主義を經として、民主主義

を緯として其旗幟を明白にせり」と述べてゐる通り、之は正しく社會主義實現のための前提として、封建的遺制の徹底的な清掃、ブルジョア民主主義革命の必要を強調せるものに外ならぬ。潜在主觀的にはプロレタリア革命を考へてゐたが、日本の現實は正にブルジョア民主主義革命こそ、その前提とならねばならぬ性質のものであり、かくて社會民主黨宣言は正しく、正にその方向を強調したのであつた。

宣言は革命を排し議會主義「民主主義」をとり、その社會主義を「人或は社會主義を觀解して全社會の財産を悉く沒收し、更に之を全人口に平分するものなりと思へり。然れども誤謬にして殆んど吾人の一顧にだにも價せざるものといふべし。……社會主義は……唯生産機關たる土地及び資本を公有として其により生ずる所の財富を公平に分配せんと欲するのみ」と指摘して、私有財産そのものの廢止ではなく正に資本の生産手段の公有たる事を述べて世の蒙を啓き、労働者の團結を一段と強調して「之を概言すれば社會民主黨は貴賤貧富の懸隔を打破し、人民全體の福祉を増進することを目的となすものなり。噫これ世界の大勢の趣く所にして人類終極の目的にあらずや」と結んでゐる。誠に堂々たる文字といふべきである（前掲社會黨篇五三〇—五三七頁參照）。

社會民主黨の禁止により、創立者達は直ちに「社會主義協會」を組織した。この間の事情を潜は次の様に述べてゐる。「社會主義の素晴らしい宣傳(宣言發表のこと……筆者)に勇氣づけられ、六人の社會民主黨創立者達は、彼等の力を轉換して、より一層の情熱をもつて、社會主義の教育宣傳活動に向けた。我々は非政治的組織たる社會主義協會を作つたのである」(六二頁)と。この社會主義協會は片山潜、西川光二郎を中心として活動せるものであり、平民社の起るに至るまでの二年有餘の間、専ら社會主義運動の中心となつた、と石川旭山は述べてゐる(社會黨三六八頁)。かくて誠に「社會民主黨は禁止せられたり、然れども社會主義の運命は之が爲に一毫をも損傷する無かりき」であり、「社會主義協會の運動は彼が如く益々猛烈に行はれ……社會主義の種子は彼が如く多く廣く蒔かれた……」(石川、同書同頁)のであつた。

「我々は社會主義協會の名前で、有料の社會主義演説會を度々開いた。漸次にだが確實に會員は増加し、やがて彼等は演説會に参加するに至つた」(六二頁)と潜は述べ、社會主義が人々の間にポプユラーなものとなつた理由を次の如く書いてゐる。即ち、「當時は、純粹な單純な労働組合運動の宣傳でさへ、政府により、益々はげしく彈壓されてゐたが、我々の労働問題並びに社會主義の煽動は比較的自由に、それは人々の間にポプユラーなものとなつたのである」(六二―六三頁)と。

潜のこの言葉から、我々は當時の官憲が、ストライキを、從つて又労働組合運動を極端に怖れ、かくて治安警察法を實施して之を彈壓せんとしたのであつて、社會主義に對しては労働組合運動の様に危険視しなかつた、といふ事情を知る事が出来るのである。

當時、新聞は社會主義協會に一般的に友好的態度をとり、例へば二六新報は社會民主黨の創立者の一人たる安部磯雄の社會主義に關する論文を二週間に亘つて掲載したし、「時事」の様な大ブルジョア新聞が協會の社會主義演説會に注意を向けてニュース欄で報導したのである(六三頁)。

潜はこの様に當時の社會主義の普及に觸れて後、明治三十四年四月三日、行はれたる二六新聞社主催の向島公園に於ける労働者懇親會について、之を「日本労働運動史上に於ける感激的な日」としてやゝ詳しく述べてゐる。

二六新報が其の紙上で労働者懇親會を四月三日、向島公園で開催する旨發表すると、六千名の鐵工を含む約一萬五千名の労働者が二十錢の入場料を支拂つて入場を申込んで來たのである。これは一旦政府によつて禁止されたが二六新報は之に屈せず開催を主張し、盛んに折衝して、五千名以内で開催してもよいといふ許可を得たのである。この五千名以内でといふ警視廳の見解を潜は次の様に語つてゐる。「警視廳は五千名以上の警官を召集する事が出来ないから、それ以上の労働者の公園集合

を許す事は出来ない、と主張した」と。労働者一人に警官一人の監視が無ければ政府は不安であつた譯である。

扱て、そこで申込者が五千名を超過してゐるので二六新報は先着順に入場を許す方針をとつたが、労働者は我勝ちにと、前夜から公園に詰めかけ、朝には既に豫定人員以上の者が集つた。かくて一萬三、四千名の労働者が懇親會に出席したのであつた。「警察も平和的な大衆デモの前には無で力あつた」と潜は書いてゐる。

そして懇親會は、工場法、普通選挙その他を要求する決議案を議決したのである。かくて懇親會は大成功であり、「この日、少くも、日本の労働階級はその實力を發揮した」譯である。だが政府は警察も大衆デモの前には無力である事を覺り、其後は大集會を許さなかつたのである。(六三—六五頁)。

この二六新報の労働者懇親會につき、山路愛山はその「現時の社會問題及び社會主義者」(明治四十一年)の中で次の様に述べてこれを日本社會主義史上重大な事件であるとしてゐる、即ち「……物見高い江戸の士民をして始めて労働者の勢力と社會主義の如き感情の恰も春霞の棚引くが如く、驟然と労働者の間に存在するを驚異せしめたり」と、そしてこれが僱主は實は片山潜であつたと記してゐる。「……労働者懇親會の名をもつて現はれたる此會合の僱主は固より二六新報社なりしがども、其の背後には片山氏及び片山氏の率ゐる小數の書生、労働者、及び普

通選挙期成同盟會に列れる小數の有志家ありしことを記憶せざるべからず」(明治文化全集社會黨所收、同三八二頁)と。

社會民主黨禁止直後、幸徳・堺がその主要な記者であつた萬朝報は、多くの社會主義綱領を持つ一種の自由主義的な改良クラブたる「理想園」の組織に着手したのであるが、之は「一般に、禁止された社會民主黨の事業を復活しようとするものだとの印象を與へた」。しかし、この期待も數年で消滅したのである。ところで明治三十六年の秋、日露の戦争の危険が迫つた時、萬朝報は極端な侵略主義的立場をとつたので幸徳と堺とは萬朝報を辭任した。其の後平民社を創立して果敢な反戰活動をやつた事は餘りにも有名であるが、これは第四章の「社會主義運動と日露戦争」で詳しく述べてゐる。

扱て潜は社會主義運動の發展を、労働世界の購讀者の増大について述べ、これが、月二回の發行であつた労働世界を日刊にまで擴大する必要を痛感させるに至つたと誌し、明治三十五年一月一日、日本最初の日刊労働者新聞*が發刊された事を報じてゐる(六七頁)。

* これは「内外新報」と稱した。

この日刊労働者新聞は「主として労働者階級によつて支持」(六七頁)され、安部、幸徳、木下その他多くの人が論文を書いて潜を助け、潜は又新聞の財政上の責任を負つたのである。この日刊労働者新聞は、「労働階級、特に鐵工組合の心からの支

援があつたにもがゝわらず、事務上の經驗の缺除其他の原因で經營困難となり、「私及び労働者並びに社會主義のために大きな損失であつた」(六八頁)が遂に一時廢刊された。之は二ヶ月後、雜誌の形式で復刊せられた事は後に述べるが如くである。

四 一般の話題の對象となつた社會主義

「明治三十年、労働組合期成會の起りてよりは眞の堂々たる労働運動となり、三十三年に至りて又衰退の時期來りしも、本年(明治三十四年……筆者)に入りてよりは復活の徴と労働運動の規模更に大ならんとするの徴現はれたり」(片山・西川共著「日本の労働運動」社會篇二七三頁)。かくて社會民主黨創立されしも直ちに禁止され、これを轉機として、「社會主義協會」を中心として約二年有餘、活潑な社會主義の教育宣傳活動が積極的に繼續せられ、労働者の大懇親會が持たれ、労働世界は普及し發展して労働者の「心からの支援」になる日刊労働者新聞となり、かくて社會主義は廣く宣傳せられ、今や社會主義は「一般の話題の對象」(socialism a popular topic)となるまでに立至つたのである。片山潜は本章を次の様な言葉をもつて書き始めてゐる、「明治三十五年及び三十六年は、労働運動と社會主義運動とが結合して活動した最も順調な時期であつた。社會主義は、世間で最も廣く研究され、論議された一般の話題であつた」(六九頁)と。

日清戦争後のブームとその後の不況、朝鮮の支配をめづつての日露の係争——等々の事情で、潜等の労働運動並びに社會主義の宣傳は労働者間に廣く滲透し、「一般の民衆も社會主義を非常に熱心に學び且つ論議した」のである。潜等は方々へ社會主義宣傳旅行に出掛けた。又休刊されてゐた日刊労働者新聞は「社會主義」と改題(改題は三十六年)して「よく改善された雜誌の形」(七〇頁)で明治三十五年四月三日復刊され、二週一回の割合で刊行されるに至つた。かくて潜等の「社會主義運動は自然労働世界の編集といふ仕事を中心として行はれ、安部・幸徳・木下・堺・西川氏等が寄稿したばかりでなく、ラッサール傳やゾラの「労働」や其他「メリー・イングランド」等が譯載され、又ミランの事業等も紹介され、なか／＼盛んで、潜の言葉を借りれば「社會主義と労働運動とはポピュラーなものとなつて來た」(七一頁)のである。

扱て潜は社會主義がいかに一般化したかを、當時の名士等が後には社會主義の彈壓者となつた者も皆、労働世界の記者との會見で「自分は社會主義者だ」と語つた、といふ事實をあげて、なか／＼辛らつに説明してゐる。大隈の「古い時代から我々政治家は國家社會主義であつた」といふ言葉や福地源一郎の「日本の國體は眞の社會主義である」や和田垣謙三の「日本人は社會主義的國民である」や新渡戸稻造の「自分は社會主義者である」等々の言葉をあげてゐる。社會主義の流行*を思ふべきで

ある。

* ウェブも十九世紀末葉の英國における社會主義の流行につき、次の様な興味ある事實を記してゐる。「我々は今や皆、社會主義者である。とウィリアム・ハーコート卿は最近、下院で公言した。そしてプリンス・オブ・ウェールズも同様な事を流した」(Sidney Webb; Socialism in England, 1889, p. 1)

「この時代の社會主義運動の發展は非常にスムーズで我々は著名人の同情を得たばかりでなく矢野文雄の如き力強いすぐれた社會主義者を獲得した」(七五頁)と潜は述べ、矢野文雄につき紹介してゐる。

前に勞働世界は明治三十五年四月三日、復刊された事を一言したがこの日が明治三十五年の潜等社會主義運動の開始點であつたのであり、明治三十六年には六十七回の集會(演說會)が開かれ、三十五年四月以降三十六年末までの十九ヶ月間に合計百八十二回の演說會が開かれたのであつた(七七頁)。この間、潜等は屢々社會主義の宣傳旅行に出掛けてゐる。そして「社會主義運動の組織的な活動は、政治的な組織が禁止されてゐたので社會主義協會が唯一の組織であつた」(七八頁)譯で専ら教育宣傳活動に限られてゐたのであるが、しかしこの協會は、主要都市に幾つかの支部を持ち「勞働階級特に炭礦夫に強い影響を與へた」(七九頁)のである。

片山潜と明治勞働運動史

社會主義協會は日本の社會主義者を組織したものであり、明治三十六年四月に大阪で全國社會主義大會が開かれた事を潜は報じ、同じ頃、大阪市の公會堂で二回、大演說會が開かれ、澤山の聴衆に社會主義の目的について、好印象を與へた、と述べ、次の様な決議案が満場一致で議決されたと書いてゐる(原文が手許に見當らぬため翻譯のまゝの文章をのせることにする)。

一、我々日本の社會主義者は、人類社會を社會主義の基礎の上に再建すべく懸命の努力をなすであらう
二、我々は日本に社會主義を實現するため努力するであらう
三、社會主義の最後の目的に到達するためには全國社會主義者の努力一致の行動が必要である

以上の様に明治三十五、六年の二年間は社會主義の流行期であつた。勞働組合運動の衰退死滅の上に榮えた社會主義の教育・宣傳、これは國家にとつても又資本にとつても何等痛痒を感ずるものではなかつたであらう。社會主義が流行した所以である。かくて日露戦争の切迫開始によつて、社會主義者が反戦活動を行ふに至つて始めて、社會主義者並にその運動は危険なものとして感ぜられ、後、強い弾壓を受けるに至るのである。

假て明治三十六年中にその後の日本の勞働運動に大きな影響を與へた注目すべき事件が二、三起つた、として潜は次の様に述べてゐる。「一つは戦争に對する社會主義者の態度である。……我々は確乎たる反戦態度、特に日露戦争反對の立場をとつ

た。最初の社会主義者の反戦大会が明治三十六年十月八日、東京のYMCAで開かれた。侵略的反動團體の烈しい反對を押しきつて開かれ大きな成功をおさめたのである。この大会は、日本社会主義者の、来るべき戦争に反對する最初の反戦宣言であつた譯である。その時の演説の精神と基調は、日露戦争中の社会主義者の烈しい反戦闘争の豫言であつた。

第二の事件は二人の同志、幸徳と堺の二人が萬朝報をよして、積極的な社会主義宣傳活動に入つて來、すべての時間をあけて社会主義のために専念するに至つた事である。……この二人の同志が積極的な社会主義活動に入つて來た事は將來の日本社会主義運動に強い影響を與へることになつた」(八二—三頁)と。

片山潜は明治三十六年、北海道へ旅行し、夕張炭礦を訪れ、歸京後同年十二月、明治三十七年開催のアムステルダム万国社会黨大會出席のためアメリカへ向つた(八三頁)。この大會においてアレヘーノフと潜が大會の附議長に選ばれ互に握手し、兩國の専制主義者の軍國主義打倒の演説をしたが、潜の演説をローザ・ルクセンブルグが獨譯し、ジャン・ジョレスが佛譯した事は餘りにも有名な事件である。國際主義者片山潜の面目、誠に躍如たるものがある。

社会主義は勞働階級に深く滲透したが、潜は、鐵工組合の創立以來の幹事であつたので「常に勞働者と接觸」して來たのであつた(八三頁)。潜は云つてゐる。——私の知合の多くの勞働者

及びその家族は數多の愉快な經驗を私に與へ、又勞働組合が死滅し、もはや組合員でなくなつた後も長い間、社会主義運動を支持した——と。

かくて誠に潜等の社会主義運動は勞働者の立場を見失はなかつたのであり、勞働階級の利害を忘れなかつたのである。——と潜は自ら語り、『かくて私は見解においても手段においても決して極端に走らず、我々の運動は、「知識階級的偏向」(Intellectual Bias)によつて壓せられる事は無かつたのである』(八四頁)と結んでゐる。

勞働者の日常利益確保を常に念頭に置き、知的偏向を犯さず常に勞働者と共に歩み共に考へ共に悩んだ潜の眞面目がよく表現されてゐる。山路愛山が片山潜を評して、「思想は堅實なりされどもその調子は寧ろ遲重なり。……克己忍耐の力あり。……片山氏は勞働者の友なり。否或意味においては氏自ら勞働者なり。其の金錢に對する良心は一個の銅錢と雖も其の手を放ち肯んぜざるものあり、其の事業は實務にあり、寧ろ同志に惡まるゝも其の精細なる計畫を遂行せんとす」(山路愛山、「現時の社会問題及び社会主義者」(明治文化全集社会篇三八六頁)と言つたが誠に至言である。(未完) (一九四七・一〇・一五)